

コロナ禍での日本の劇場・オペラ団体 ～指揮者 沼尻竜典氏に聞く～

沼尻竜典 (指揮者、びわ湖ホール芸術監督)

石田麻子 (聞き手／『日本のオペラ年鑑』編集委員長)

2021年10月18日実施

びわ湖ホールの《神々の黄昏》無観客配信を
再び振り返って

石田：びわ湖ホールでは3月に、コロナ感染拡大の影響で劇場を閉じるということになって、急遽3月7・8日の《神々の黄昏》公演を無観客配信に切り替えて上演されました。その時のことは様々に報道されましたが、年鑑というメディアの性格上、記録という意味でも、もう一度お聞かせ願えますか？観客がいる状況での通常公演はできなかった。それを無観客配信でという判断は、マエストロと山中隆館長との間でぜひやりたいという方向を確認して、アーティストなり関係者に話を持ちかけたということによろしいのでしょうか？

沼尻：館長と2人だけの判断ではなく、事業部の職員も入れた合議の上での決定でした。それも美しく初めから全員一致で「やろう！」と決まったのでは全くありません(笑)。

無観客で配信をするという決定は、公演の10日ほど前だったと記憶しています。その時点で公演を完全に中止すれば、宿泊費や日当が1,000万円くらい助かる。日本はオペラ上演に必要な人的資源が東京に集中していますから、びわ湖ホールのオペラには莫大な宿泊費がかかるのです。「無観客では無収入になるし、チケットの払い戻しに経費も掛かるので、これ以上の支出は少しでも避けたい」というのが、一部の職員の意見でした。これはある意味、財布を預かる側として真っ当な考えです。



ただ私は、せっかくここまで準備してきたし、そこまでにかけて来た労力も経費も無駄にしたくなかった。山中館長も同じ思いでした。彼は県庁出身ですが、アーティストの気持ちが分かるのです。最後は「お金のことは私が責任を負う」とおっしゃって、GOサインを出してくれました。

石田：2018年の開館20周年記念公演のマーラーの「千人の交響曲」の時にも、そんなことがありましたよね？

沼尻：はい。公演当日に台風が直撃する予報が出たので、予定していた公演は中止として、その前日に緊急特別公演を開催しました。リハーサルがすごく上手くいっていて、「これは中止ではなくて、リハーサル最終日である公演予定日の前日にやっしまえば良いのではないか？」と真夜中に思いつき、山中館長にメールをしたら、「それは面白いね」と乗ってくれました。彼はクラシック界の常識を知らないからこそ、さまざまな危機にも柔軟に対応できるのだと思います。音楽につ

いては「私は素人で…」とおっしゃるのですが、劇場への愛はだれよりも深い。そういう方だから、私も長く芸術監督が続けられたのです。

石田：《神々の黄昏》は、びわ湖ホールが存在や考え方を世間にアピールできて、最終的にとても良い結果になりました。

沼尻：そうですね。菊池寛賞も受賞できました。音楽以外の様々な分野も対象になっている賞が、まさかいただけるとは思っていませんでした。同じ年の他の受賞者は、作家の林真理子さんや佐藤優さんといった知名度のある人ばかりで、彼らと同じ土俵で評価されたのは凄いことです。クラシック業界はメジャーではないですし、びわ湖ホールもまだ日本全国に知られているわけではありません。だから例えば、私が何かのインタビューを受けた際に略歴を出して、「ちょっと長すぎるので編集させてください」と言われ、『びわ湖ホール芸術監督』という部分が消されてくることもまだまだあるのです。

石田：びわ湖ホールの芸術監督は10年以上務めていらっしゃるんですよね？

沼尻：そろそろ16年目に入ります。でも地方都市の文化施設のことを全国に知らしめるのは、東京一極集中の日本においては至難の業で、ずっと苦勞してきました。大津市に隣接する京都市にでさえ、滋賀県版に掲載された文化記事が全く出ないとか。

だから、存在感をドーンと出したという意味では、《神々の黄昏》の無料配信は非常に効果的でした。運が良かったこともたくさんあって、ちょうどハンベさんの演出が映像を多用した関係でスタッフがいましたし、装置と衣裳を担当したギールケさんが、「なるべく良い映像を残したい」と持ち込んでいたカメラもあった。音響は優秀な専門家がいつもいますから、あとはそれを配信するだけでした。あれだけの準備を、1週間でゼロからやっ

ていたら、多分間に合わなかったでしょう。先ほども申し上げたように日本という国は、東京に全てが集中していますから、スタッフや機材の手配も難しかったと思われます。

石田：しかし、そういうラッキーなことが重なったとはいえ、コロナ禍における一つの金字塔となりました。

沼尻：他に催しがなかったということもあって、しばらくはその話ばかりでしたね。

石田：新聞や雑誌などのメディアも、非常に感動的なストーリーとして取り上げてくれていた。

沼尻：無料だったということ、まだまだその時期は配信が珍しかったということもあったのでしょうか。5時間半もかかるオペラだから、ちょい見の人や幕見の人も、いっぱい来たのです。それで延べ41万ビューというすごい記録になった。通して全編を見た人となると、おそらく各日1万3,000人程度だったと思います。

石田：ワーグナーということもあって、他の国からのアクセスもあったのでは？

沼尻：ありました。ほとんど日本語でしかインフォメーションをしていないのに、どうやって知ったのか分からないですが、バイロイトやベルリンの映像が見たくて検索した人が、偶然に見つけたかもしれないですね。

そういえば最近のバイロイトはつまらなくなったと、私の知り合いは皆さん言います。内容はともかく、バイロイトがテーマパークのようになって、以前のような客席の緊張感が、今はほとんどないと。もちろんワグネリアンもたくさん来ているでしょうが、観光地的な要素が増え過ぎてしまっているのではないかと思います。

石田：「バイロイト詣」ではなく「びわ湖詣」みたいな言葉ができてきているみたいですね。

沼尻：「びわロイト」です（笑）。バイロイトをはじめとするドイツ各地では、裸を出した

り、叫んだりとか、変な演出が増えてしまった。新しいファンを何とか取り込みたいと一生懸命なのは良いことですが、「ワーグナーらしいワーグナーを観たい」という観客は離れています。

だから今や希少価値となった「ワーグナーが考えていた通りのワーグナー作品を見せる劇場」として、びわ湖ホールの価値は高まっています。ワーグナーはト書きと音楽とを、ピッタリ合わせていて、例えば火が出る場面では、燃え盛る炎のような音楽が鳴るし、川が流れるところでは水音のような音型が書いてある。オーケストラから「剣の動機」が聴こえたら、舞台では剣が出て来ないといけない。そこでピストルが出て来たら、話題にはなるかもしれませんが、昔からのファンは興ざめです。ハンペさんはそれらをきちっと処理するので、ドイツではひと昔前の演出家といったイメージで語られてしまうこともあります。しかし彼はブレません。彼の著書を読むと分かりますが、「演出は音楽や台本に即したものであるべきだ」という確固たる信念があるのです。

私は以前音楽総監督を務めていたリューベック歌劇場では「何だこれは？」と思うような演出のオペラを振った経験がずいぶんあります。ところが、変わった事をすればするほどマスコミが取り上げ、舞台写真が全国に届き、その演出家が他所でも仕事を取ったりするようになる。場合によってはそれで注目を集めて、どこかの劇場の支配人になったりする。音楽を多少犠牲にしても、とにかく目立たなければいけない。欧州では《魔笛》などの有名作品の新演出が年に何十本も出るわけですから、その中で普通のことをやっていたら埋没してしまいますね。

いわゆる「読み替え演出」でも、最初から最後まで筋を通し、観客を納得させる手腕のある人もいますが、残念ながらアイデアが

途中で破綻するほうが多いです（笑）

石田：それでも、話題を呼ぶということに重きを置く場合もあるということですよ？

沼尻：そうなんです。ドイツはほとんどが公的補助金でやっているのですが、これで済んでいますが、民間の支援が中心のアメリカだったらあり得ないでしょう。だからアメリカのほうが、初めてその作品を見る方には安心です。

ともあれハンペは、確実に正統的な演出をする。私も《ワルキューレ》以外は今回初めて指揮したわけですが、彼のおかげで作品に無理なく入って行けたし、演出から音楽を学ぶことも多かった。歌手にとってもそうです。例えば「ライトモチーフがここで出る意味」を、演出家がきちんと歌手に説明してくれることで、歌い方が変わってきます。演出によって音楽が磨かれていくという、昔は当たり前だったことが、「びわ湖リング」の現場では出来ていました。

石田：それを共同作業として1年に1作品ずつやってこられたわけですね。

沼尻：そうです。四年目の《神々の黄昏》が総仕上げという位置づけでしたから、中止にする選択肢は有りませんでした。

コロナ禍での指揮活動について

石田：びわ湖の話から離れまして、コロナ禍でのマエストロ自身の活動状況はいかがですか？

沼尻：例えば、私は今、静岡音楽館AOIでベートーヴェンのシンフォニー・チクルスをやっているのですが、「第九」が演奏できていません。合唱の練習がまだ無理なのです。

石田：アマチュアが出演する演奏会ですね。

沼尻：はい。プロの合唱団よりアマチュアの方が活動再開の基準は厳しいです。アマチュア合唱は不要不急の趣味の活動で、そこで感染して会社を休んだら大問題になります。

石田：オペラでも、アマチュアが関わるもの

はなかなか大変ですね。

沼尻：県民オペラや市民オペラは難しいですね。だからそこに参加しているプロのソロ歌手たちの仕事もなくなってしまうのです。

石田：その負のスパイラルというのが起きています。少しずつ再開されてきたとはいえ、例えばびわ湖ホール声楽アンサンブルのお仕事というのは、沼尻さんは気にかけて機会づくりをされたのでしょうか？

沼尻：びわ湖ホール声楽アンサンブルは、給料制なので良いほうです。オーケストラも給与カットになっているところはありますが、ゼロになったところはないでしょう。年金も保険も払われている。今一番大変なのはフリーの人たちです。特に舞台技術関係の人はフリーが多いのですが、オペラが再開されても演奏会形式では仕事がないし、将来を担うべき若手が離職してしまっている現状があるとも聞いています。

石田：2021年1月の「びわ湖ホール オペラへの招待」で《魔笛》を上演されました。これがびわ湖ホールでのオペラ公演の再開でしょうか。そこに至るまでいろいろなご苦労があったことと思います。芸術監督として力を発揮した場面は、2020年3月の《神々の黄昏》の時以外ではいかがでしたか。

沼尻：ディスタンスにしたって、取れば取るほど感染予防に良いのは決まっていますが、歌手間の距離を取り過ぎては、入場料をいただくレベルのアンサンブルは無理です。はっきりとした国の基準があるわけでもないの、判断は難しい。出演者の中にも「もっと距離を取らないと心配」という人もいますし。

石田：解決したのでしょうか？

沼尻：状況は刻々と変化するし、解決はないですね。なんとか音楽への悪影響を最小にする努力はして来たつもりですが。

2020年に私が関わっていたオペラ公演でも、コロナによって中止になったものが数多

くありました。「近江の春 びわ湖クラシック音楽祭」の中で上演する予定だった《ジャンニ・スキッキ》は、演奏会形式でしたが、音楽祭ごと中止になってしまいました。

日生劇場とびわ湖ホールが提携する予定だった《セビリアの理髪師》は、東京での一般公演2回、学校招待公演7回、びわ湖での一般公演2回、学校招待公演1回の計12公演が中止になりました。2022年に延期公演がある予定ですが、歌手たちが2年間ずっと役を温め続けるわけですから、理解がより深まっていると思います。不謹慎かもしれませんが「怪我の功名」を期待しています。

石田：他に中止になったものでは、沼尻さんご自身が作曲された《竹取物語》がありました。これも残念でしたね。

沼尻：新国立劇場の地域招聘公演としても上演予定でした。びわ湖ホールでの延期公演は2022年の1月に予定されていますが、新国立劇場に持って行くプランはなくなってしまいました。

石田：8月はびわ湖ホールで《ヘンゼルとグレーテル》のオペラ指揮セミナーは実施されましたね。この時も気を使われたのではないですか？

沼尻：ディスタンスを取ったせいで、いつもより遠方に立つことになった歌手を、指揮の経験の少ない受講生が振るのは大変そうでした。ただ、かえて良い修練の場になったと思います。このセミナーは非常に成果が上がっていますが、22年度が最終回となります。

コロナ禍のアーティストへの影響

石田：コロナ禍は、アーティストとして活動する上でどうでしたでしょうか？日本人の指揮者、日本人の歌手の一部の人たちに仕事が集中するということも起こりました。

沼尻：一部の中堅、ベテランに集中していますね。「外国人の代役なので、お客様が納得

する人を」ということでしょう。そんなムードの中、若手にもチャンスをもたらした人たちがいて、彼らは大きく評価を上げました。私が若い頃には日本人の若手がやっていた仕事を、最近では外国人の若手に持って行かれる状況が続いていたので、これは良かったと思っています。

新国立劇場でも代役の日本人歌手たちが大活躍しました。これで「もう少し日本人歌手を積極的に登用して行こう」という機運が高まるかもしれません。

石田：コロナ禍前には、外国の名だたる指揮者を招聘していたオーケストラにとって、今の状況はどうなのでしょう？

沼尻：どんなに「日本を愛している」とおっしゃる外国のマエストロでも、家族を呼び寄せて、日本在住となってくれることはないですよ。言葉の問題もありますから。だから重要なタイトルを持っていても、回数が多めの「首席客演指揮者」的な立場に留まることになる。そんな現実もコロナ禍では見えませんでした。

石田：コロナ禍での精神的な影響というのは、アーティストにとってどうだったのでしょうか？

沼尻：アーティストにとって一番つらいのは仕事が無いこと、少ないことなので、そういう状況が生まれてしまったのはキツイですね。

石田：特に歌手は、本当に仕事が無くなってしまいましたよね。

沼尻：歌手は飛沫を飛ばすということで、一番避けられてしまいました。今なおオーケストラのプログラムに、合唱作品はあまり入りません。少しずつ回復してるとは思いますが。

石田：そうですね。逆にマエストロご自身にとってコロナ禍はどういう影響がありましたのでしょうか？

沼尻：私だけでなく、音楽家たちは公演が無くなって空いてしまった時間に本を読んだ

り、映画を見たり、楽譜を研究したりすることが出来ました。遊びに行くこともできませんでしたから、勉強するか寝るかです（笑）。コロナ前まで「自転車操業」的に働いていた人たちが、自分を高める時間を得たことで、コロナ後の音楽界は、よりレベルアップするかもしれないと考えています。

ただ「コロナが終わってお客様が戻ってきてくださるのだろうか？」という恐怖感は、正直あります。

コロナ禍での観客の反応

石田：コロナ前、コロナ後で指揮台にお立ちになられていて、お客様の反応の変化について、何か感じられるところはありますか？

沼尻：これも常に変化しています。2020年の3月ぐらいから演奏会がなくなって、最初の長い休止がありましたよね。それで7月ごろに再開した時は、舞台に出ていっただけで大拍手でした。こちらもそれだけで感激して、泣きそうになりました。

掛け声が禁止されたせいで、余韻をぶち壊すような「ブラボー」が無くなりました。コロナのせいで「余韻を楽しむ素晴らしさ」を知ったファンの方も多いのではないかと思います。

公演配信の可能性

沼尻：びわ湖ホールは配信で大きく騒がれましたけれど、配信は生演奏の代わりには絶対になり得ないと考えています。有料だとそんなに人は来ない。《神々の黄昏》も無料だから41万人が見たわけです。1,000円、1,500円と払わなくてははいけないとなると、みんな考えるでしょう。「同じだけ払うならベルリン・フィルを聴いたほうが良い」と思う人も当然出て来ます。そうすると、日本の演奏団体や劇場は世界を相手に戦わないといけない。世界一流に対抗する別の魅力をアピール

する必要があるでしょう。

オペラだと例えば、多額の予算が使えるメトロポリタン歌劇場(MET)と戦わなくてはいけない状況になります。しかし、日本の劇場がMETクラスの歌手や指揮者を簡単に呼べるわけがないし、会員制のオペラ団体ではそもそも会員以外の歌手がステージに上がれない。そうなると、世界の一流には絶対できない日本語上演の価値が上がってくると思うんです。

田中信昭訳の《ヘンゼルとグレーテル》なんて、上演されるたびに皆が手を入れて、今ではものすごく良い訳詞になっている。中山悌一訳の《フィガロの結婚》も素晴らしいですよ。今でも充分通用します。特にオペレッタでは、オチが歌手の口から出たとたんに笑えるって、良いことじゃないですか？字幕に書かれたオチに笑うのでは時差も生じるし、オペレッタらしい舞台と観客のリラックスした関係も生まれにくい。昭和時代には日本語上演のオペラがたくさんあって、一流の歌手たちは日本語でお客様を掴むスキルを備えていました。そんな時代が戻ってくる可能性もあると思います。

コロナ禍での補助金のありかた

石田：コロナ禍で他に気になっていらっしゃることはありますか？

沼尻：オペラ界では、コロナによる減収を救済するための補助金が、オペラ団体を中心に出ました。時間が無い中「受け皿」としてオペラ団体を活用したことは良い方法ですが、救いの網から漏れた人も多かったように思います。

受けた補助金の使い方を決める立場にある

人は、どうしても個人の救済より、団の存続を考えてしまいがちなので、本当に困っている個人にも救いの手が届く方法があればと思いました。

例えば各地の劇場が、コロナ救済のためのプロダクションを制作すれば、キャストは「所属団体がどこだから」ということではなく、音源審査やオーディションで決まって、無所属の歌手もコーラスに入れられる。そうして垣根をこえて高いレベルの歌手を確保すれば、公演も面白くなってお客様の増加にもつながります。制作能力に不安がある劇場には、専門知識を備えたヘルプの職員を派遣することも考える。そうすれば各地の劇場の制作能力も上がるでしょう。もちろん稽古期間は必要になりますが、オペラ界がまとまるキッカケにもなって、ひと手間かけるメリットはあると思います。

石田：若手歌手は、本当にお仕事もなくなっているでしょう。

沼尻：私は、中堅クラスの方々が今は一番大変なだと思います。家庭もあるだろうし、大学もまだ非常勤だったりする。だから、これからのオペラ界を支える中堅歌手をまず救う必要があります。あと、コロナ禍のものだけではなく普段から、補助金申請のための書類を書くのが大変すぎて、職員がかかり切りになって本来の制作能力を存分に発揮できないことがある。これを少し簡略化していただくことも、大きな「補助」になるのではないのでしょうか。

石田：芸術監督のお立場から、そして一人のアーティストとしてのお気持ちもふくめ、貴重なお話をいただきました。本日はどうもありがとうございました。